

遊戯王の世界に生まれたのですがどうすればいいのでしょうか？

ヤドン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いつのまにかArc-V次元に転生した少女。

彼女の中の遊戯王の知識はZEXALまで、

右も左も主人公もわからない彼女がとりあえず日記をつけるお話。

基本日記形式で話が進むため、デュエルは少なめです。

重要な場面や、他キャラ視点などではきちんとデュエルします。

また、一部キャラの強化やキャラ崩壊などの恐れがあります。

さらに、作者はArc-Vは最後のズーク戦以降とシンクロ次元編（現在放送中）以外はまとめサイトで見た程度の知識しかありません。

それでもいいよ！ という方だけ、どうぞお楽しみください！

## 目次

没ネタ集

没ネタ 舞網チャンピオンシップ—ジュニア編の後に  
入る予定  
だった 1

原作前

こんな世界で 20

ある日、濃い人たちに、であつた 27

融合もシンクロも、エクシーズすらもない 34

扉を開ければそこは異世界 40

舞網チャンピオンシップ—ジュニア編 48

ハートランドを歩く 56

スラム街に迷い込む 61

少しずつ変化する日常 67

伝説の始まり—前編 73

## 没ネタ集

没ネタ 舞網チャンピオンシップ—ジュニア編の後に入る予定だった

『さあやってまいりました、舞網チャンピオンシップ・ジュニア戦決勝！ 二人とも初出場ながら決勝戦にまでやってきた実力の持ち主です。これからどんなデュエルが行われるのか楽しみですよ！』

舞網チャンピオンシップ—ジュニア決勝戦会場。

ユース、ジュニアユースと違いドーム型の会場を使用するのではなく、その側に設けられた広場にて行われる。

その中央に二人の少年少女、千樹優華と沢渡シンゴが対峙している。

「優華ー、がんばってー！」

広場の外で彼女の友達が声援を送っている。

『さあ、まずはアクションフィールドの選択ですよ！』

そうアナウンサーの女性が告げると広場が光に包まれ、変化し始める。

何も無い広場から、植物あふれる自然に満ちた森の中へ。

『これは、フィールド魔法 ミツリンチホー！ 二人にはここで最後まで元氣あふれるデュエルしてもらいたいですね』

広場すべてが密林へ変わると二人は互いに歩み寄り、開始の合図を告げる。

「戦いの殿堂に集いしデュエリストたちが！」

「モンスターと共に地をけり〜」

「宙を舞い、フィールド内を駆け巡る！」

「みよ、これぞ〜、デュエルの最強〜進化系〜、アクション〜」

『デュエル!!』

V S

YUKA LP4000

SHINGO 手札5

「先行はこの俺だ！ はは……、これはもう勝敗は決まったようなものだな！」

自らの手札を確認し、不敵に笑う。

「俺はモンスターを裏守備表示で伏せてターン終了さ！」

SHINGO手札5↓4

場に一枚のカードが現れ、その上にまるでそれを守るように不気味な黒玉の物体が出現する。

言葉のわりには冴えないプレイング。それに観客たちは怪訝な顔をする者も出てくるが、対戦相手である優華と一部のデュエリストは違った。

（うーん、あれが虚勢だとも思えないし、何よりあれがりバースだったら怖い、攻撃力が高いのならそのまま攻撃表示にするだろうし、何かあると思った方がいいよね）

「私はカードをドロ〜、そして、ランカの蟲惑魔を召喚します〜」

YUKA手札5↓6

【ランカの蟲惑魔】

星4／地属性／昆虫族／攻1500／守1300

(1)：このカードが召喚に成功した時に発動できる。

デッキから【蟲惑魔】モンスター1体を手札に加える。

(2)：このカードはモンスターゾーンに存在する限り、

【ホール】通常罨カード及び【落とし穴】通常罨カードの効果を受けない。

(3)：iターンに1度、自分フィールドにセットされた魔法・罨カード1枚を対象として発動できる。――

デュエルディスクにカードをセットすると、彼女を守るように綺麗な華飾りを身に付けた妖艶な少女と美しい桃色の花が出現する。

「デッキから【カズーラの蟲惑魔】を手札に加えて、三枚伏せてターン終了了」

YUKA手札6↓5↓6↓3

彼女が使う蟲惑魔というモンスターは攻守共にとりたてて騒ぐほどのものではなく、ただ倒すだけならばそう難しいことではない。

そう、倒せるならばの話だが。

蟲惑魔モンスターには共通する効果があり、『それはこのカードはモンスターゾーンに存在する限り、【ホール】通常罨及び【落とし穴】通常罨カードの効果を受けない。』というもの。

これだけならば脅威ではないのだが、問題は彼女らが持つ個別の効果にある。

優華が準決勝で相手に止めをさしたアトラの蟲惑魔を例にすると、

#### 【アトラの蟲惑魔】

星4／地属性／昆虫族／攻1800／守1000

このカードは【ホール】または【落とし穴】と名のついた通常罨カードの効果を受けない。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分は手札から【ホール】または【落とし穴】と名のついた通常罨カードを発動できる。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分がコントロールする通常罨カードの発動と効果は無効化されない。

となる。

つまり、このカードを場に出すだけで手札から【落とし穴】系罨カードを発動することが可能になる。

場に伏せる必要がないということとは事前に相手からの【サイクロン】などの除去を受けることもなく、【王宮のお触れ】などのフィールド上の罨を無効にする効果もかいくぐれてしまう。

このように蟲惑魔と名の付くモンスターはすべて【落とし穴】系罨カードと組み合わせることで無類の強さを発揮するモンスターであ

り、その名の通り来るものを惑わせる悪魔なのだ。  
しかし、だからと言って弱点がないわけではない。

例えば――

「俺のターン、ドロ―！　そして、人造人間―サイコ・ジャツカーを反転召喚」

SHINGO手札4↓5

「!?!」

人造人間と名の付くモンスターは、蠱惑魔の天敵として有名だ。

（うわあ、面倒なのがきたなあ……）

優華は驚愕していた。

それは彼が自身の天敵である人造人間モンスターを使ってきたということ、そしてそれが優華の知らないモンスターだったということに。

それも当然のこと。このサイコ・ジャツカーは九期第三弾にて追加されたモンスター、八期までしか知らない彼女にとっては未知のカードとなる。

そして、それが致命的な隙となる。

「サイコ・ジャツカーをリリースして効果発動！　デッキから人造人間―サイコ・ジャツカー以外の「人造人間」モンスター1体を手札に加える！　俺はデッキから「人造人間―サイコ・ショツカー」を選択」

SHINGO手札5↓6

「……ええっと」

彼の効果説明を聞きつつ、デュエルディスクでサイコ・ジャツカーを効果を表示する。

【人造人間―サイコ・ジャツカー】

星4／闇属性／機械族／攻　800／守2000

【人造人間―サイコ・ジャツカー】の（2）の効果は1ターンに1度

しか使用できない。

(1) : このカードのカード名は、フィールド・墓地に存在する限り【人造人間―サイコ・ショック―】として扱う。

(2) : このカードをリリースして発動できる。

デッキから【人造人間―サイコ・ジャッカル―】以外の【人造人間】モンスター1体を手札に加える。

その後――

(……………やば)

そして、彼女はこちらで来て初めてというほどの危機に陥ることになる。

「そしてその後、相手の魔法&罠ゾーンにセットされたカードを全て確認し、その中に罠カードがあった場合、その数まで手札から【人造人間】モンスターを特殊召喚できる！ さあ、何を伏せたのか確認させてもらおうか」

そういうと、彼女の場に伏せられたカードが露わになり、その内容が彼だけではなく観客にも知れることとなった。

【落とし穴】

通常罠

相手が攻撃力1000以上のモンスターの召喚・反転召喚に成功した時、

そのモンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃力1000以上のモンスターを破壊する。

【蠱惑な落とし穴】

通常罠

このターンに特殊召喚された相手フィールドのモンスターが効果を発動した時に発動できる。

その効果が無効にし破壊する。

【アーティファクト・ムーブメント】

速攻魔法



フィールド上の魔法・罠カード1枚を選択して破壊し、デッキから「アーティファクト」と名のついたモンスター1体を選んで魔法カード扱いとして魔法&罠カードゾーンにセットする。

また、このカードが相手によって破壊された場合、次の相手のバトルフェイズをスキップする。

「伏せカードの中に罠カードは二枚！ よって俺は手札から二体の人造人間―サイコ・シヨツカーを特殊召喚する！ このモンスターがいる限り、君の姑息な落とし穴カードを使うことはできないのさ！」

【人造人間―サイコ・シヨツカー】

星6／闇属性／機械族／攻2400／守1500

このカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにフィールドの罠カードの効果を発動できず、フィールドの罠カードの効果は無効化される。

「ははは……」

笑顔を保ってはいるが、内心ではこれ以上にないくらい焦っていた。

（やばいやばいやばいー！ え、どうしよ!? サイコ・シヨツカー二体とかまずいってもんじゃない！ 完・全に想定してなかった！ ていうかこれ、絶対私対策だよな！ まさかそんなことしてくるとは思わなかった！）

「更に俺は手札からサイコ・ジャツカーを召喚！」

SHINGO手札6↓3

そして追加される人造人間モンスター。

これで彼の場にいるモンスターの攻撃力の合計は5600。

もしこの攻撃がすべて通ればランカの蟲惑魔の攻撃力を引いても4300、ライフポイントが消し飛ぶ値である。

「じゃあまず、サイコ・シヨツカーでランカの蟲惑魔に攻撃」

だがしかし、それで終わるほど優華も甘くはない。

「私は手札から、【バトルフェーダー】を特殊召喚してこのバトル

フェイズを終了させますので」

YUKA手札3↓2

【バトルフェーダー】

星1／閥属性／悪魔族／攻 0／守 0

相手モンスターへの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

「ちっ、じゃあターン終了だ」

「では、私のターン」

YUKA手札2↓3

カードを引き、考える。

彼女の手札はこれで三枚、ここで少しでもミスをすればそこで終わってしまうことになる。

今ある手札と場、モンスターカードと魔法&罠カードのすべてをミスなく組み合わせ、その上で勝利する可能性を考える。

(……正直どちらでもいいけど、こっちのほうがいいかな？ あとは次のターンで最低アレを引ければ)

勝てる、そう彼女は確信していた。

「これはもう決まったようなものですな」

誰かが言う。

「ええ、得意の罠戦術も封じられ、相手の場には上級モンスターが二体、決勝まで勝ち上がったただけ運がよかったようなものでしょ」

彼女のことを知らない誰かが言う。

「私はバトルフェーダーをリリースし、そして、手札から【アーティファクト―カードケウス】をアドバンス召喚し」

YUKA手札3↓2

彼女がそうカードをセットするが、何も起こらない。

「あれ〜?」

きよろきよろと彼女が見渡すと、彼女の少し後ろに不思議な空間のゆがみがあった。

「ああ、ありました〜」

彼女もそれを見つけたようで、近づき迷うことなくそこに手を突っ込む。

「ええ〜と……」

そこで何かを探すかのように手を動かし、そして止める。

「えい〜」

掛け声とともに引き抜かれる腕、それと共に現れたのは一本の杖。昔、アスクレピオスの杖というものを見たことがあったけれど、それに近いと思う。

【アーティファクトーカードケウス】

星5／光属性／天使族／攻1600／守2400

このカードは魔法カード扱いとして手札から魔法&罠カードゾーンにセットできる。

魔法&罠カードゾーンにセットされたこのカードが相手ターンに破壊され墓地へ送られた時、このカードを特殊召喚する。

また、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手ターン中に【アーティファクト】と名のついたモンスターが特殊召喚された時、デッキからカードを1枚ドロウする。

【アーティファクトーカードケウス】は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

しかしそれでもサイコ・シヨツカーには届かない。

守備表示にしていればまだライフポイントは削れなかったかもしれないけど、彼女はそうしなかった。

「そして、ターンエンドです〜」

そう言っただけ彼女は動かない。

アクション・カードを探すこともせずに、たった一枚の手札を持つ

たままたただただ相手を見つめるだけ。

「これは諦めちゃったかな」

「いやはや、まあ仕方ないでしょ」

そういつて笑う。

それがミエルには悔しい。

ミエルは優華と何度もデュエルしてきたし、彼女がどういう性格をしているのか知っている。

たまに気の抜けたような行動をするけれど、彼女のデュエルは常に繊細な計算の上に成り立っている。

優華ならもつとできるはず。そうミエルの中の誰かがささやくけれど、あそこにいる彼女は何もしない。

「諦めちゃったの……」

そう思った時だった。

「心配なのかな？」

顔を上げると、そこにはいつもテレビで見る顔があった。

「さ、榊遊勝さん!」

ちまたを騒がせる人気デュエリスト、榊遊勝さんがそこにいた。

この後あるジュニアユースかユースの試合でも見に来たのだろう。でなければ彼がこんな小さい子供しか集まらないようなところに来るはずがない。

「なあに心配する必要はないよ、彼女はまだ諦めてはいない」

優しく私の頭をなでる。

「さあ、見てみなさい、お楽しみはこれからなのだから」

そう言われ優華を見てみれば、もうすでに対戦相手の男の子はドロローを終え、さらなるモンスターを召喚しようとしていた。

SHINGO手札3↓4

「俺は再びサイコ・ジャッカーをリリース！ 効果により〔人造人間―サイコ・ロード〕を手札に加える！ さらに、わかつてはいるけどもう一度見せてもらうよ」

そして再び露わになる彼女の守りの布陣。

「当然罨カードは二枚！ よって手札からサイコ・シヨツカーとサイコジャツカーを特殊召喚！」

SHINGO手札4↓5↓3

「うそ……」

三枚目のサイコ・シヨツカーにサイコ・ジャツカー。

さらにまだ彼は止まらない。

「さらに！俺は場のサイコ・シヨツカーとサイコ・ジャツカーをリリースして、この二体を特殊召喚する！」

掛け声とともに現れたのは、サイコ・シヨツカーとよく似たモンスター。

だけど、あれから感じる威圧感はサイコ・シヨツカー以上のものだった。

【人造人間―サイコ・ロード】

星8／闇属性／機械族／攻2600／守1600

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する【人造人間―サイコ・シヨツカー】1体を墓地へ送った場合のみ特殊召喚できる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いに罨カードの効果は発動できず、フィールド上の全ての罨カードの効果は無効化される。

1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在する罨カードを全て破壊できる。

この効果で破壊したカード1枚につき300ポイントダメージを相手ライフに与える。

「さらにさらに！ ダメ押しで【継承の印】を発動！ 墓地のサイコ・シヨツカーを復活させ、このカードを装備する！」

SHINGO手札3↓0

これで彼の手札は0、しかし何を気にすることがあるだろうか。彼の場合には上級モンスターが三体に、最上級モンスターが二体。

これを前にしたら、誰もが勝敗は決したとおもうだろう。  
彼女と遊勝さん以外は。

「ではここで速攻魔法く、アーティファクト・ムーブメントを発動く、場の落とし穴を破壊して、代わりにデッキから「アーティファクトーベガルタ」をセットさせていただきますく」  
カードが一枚砕け散り、新たにセットされる。  
だけどそれがどうしたのだろう。

アーティファクトというモンスターは私も彼女から聞いただけではいけないけれど、相手のターンに破壊されることで特殊召喚できるモンスターらしい。

しかし、相手の手札はゼロ。自分で破壊しようにも一枚だけだったアーティファクト・ムーブメントも今使ってしまった。

「さあいけ、人造人間たち！」

彼の命令に従い、人造人間たちは動き出す。

まずは攻撃力の低いサイコ・シヨツカーがランカの蟲惑魔を破壊する。

「あくれく」

YUKA LP4000↓LP3100

「これで、止めだ！」

残りの人造人間たちが一齐に攻撃を仕掛けてくる。

優華の場にあるのは彼女の右手にもつかドケウス一体。

もうだめかと思った、その時だった。

「では、二枚目のアーティファクト・ムーブメントを発動しますねく」

「何い!?!」

それに誰よりも驚いたのは、対戦相手の少年だった。

彼は確かに優華の伏せカードすべてを確認したし、それはミエルたちも見えていた。

しかし、そこにあるはずの蟲惑な落とし穴はなく、代わりにあるはずのない二枚目の魔法カードがそこにあった。

「私は場のベガルタを破壊し、デッキから【アーティファクトーアキレウス】をセットし、あとでカードケウスの効果でドロウ」

【アーティファクトーベガルタ】

星5／光属性／天使族／攻1400／守2100

このカードは魔法カード扱いとして手札から魔法&罠カードゾーンにセットできる。

魔法&罠カードゾーンにセットされたこのカードが相手ターンに破壊され墓地へ送られた時、このカードを特殊召喚する。

相手ターン中にこのカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上にセットされたカードを2枚まで選んで破壊する。

【アーティファクトーベガルタ】のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

「そしてベガルタの効果で今伏せたアキレウスを破壊、からの特殊召喚！ ついでにドロウ」

【アーティファクトーアキレウス】

星5／光属性／天使族／攻1500／守2200

このカードは魔法カード扱いとして手札から魔法&罠カードゾーンにセットできる。

魔法&罠カードゾーンにセットされたこのカードが相手ターンに破壊され墓地へ送られた時、このカードを特殊召喚する。

相手ターン中にこのカードが特殊召喚に成功した場合、このターン相手は自分フィールド上の【アーティファクト】と名のついたモンスターを攻撃対象にできない。

「最後に、アキレウスが召喚されたターン、相手はアーティファクトと名の付くモンスターを攻撃できないのです」

YUKA手札2↓3↓4

彼女の後ろの不思議な空間から一つ、二つと新たな武器の形をした

モンスターが現れる。

存在しないはずの二枚目の魔法カード、上級モンスターを相手ターンに二体も揃え、さらに攻撃を封じてしまうその手腕に、皆呆然としていた。

「せ、先輩、これは一体……」

いつの間にか来ていた少し暑苦しそうな男の人が優勝さんに尋ねる。

「ふむ、おそろくだがモンスター効果を使ったのだろうか」

「「モンスター効果？」」

ミエルと男の人と、知らない子供の声が重なる。

見ればミエルと同じ年くらいの子供が二人、男の人の後ろにいたのがみえた。

「シンゴ君が伏せカードを確認したとき、まだそこに二枚目の魔法カードはなかった、ならば入れ替えたのはそのあと、サイコ・ロードを召喚したときかバトルフェイズ前、そこでランカの蟲惑魔もモンスター効果を使ったのだろう」

「あ?！」

ミエルは思い出した。ランカの蟲惑魔固有の効果。

「バトルフェーダーは私も何回か対峙したことはあるがそのような効果はなかった、ならば蟲惑魔の方だろう、彼女の手札は二枚だった、もしそれが二枚目のアーティファクト・ムーブメントであったなら、いま彼女の手札の中には伏せてあった蟲惑な落とし穴があるだろう」

#### 【ランカの蟲惑魔】

星4 / 地属性 / 昆虫族 / 攻1500 / 守1300

(1) : このカードが召喚に成功した時に発動できる。

デッキから【蟲惑魔】モンスター1体を手札に加える。

(2) : このカードはモンスターゾーンに存在する限り、

【ホール】通常罨カード及び【落とし穴】通常罨カードの効果を受けない。

(3) : iターンに1度、自分フィールドにセットされた魔法・罨カー



ド1枚を対象として発動できる。

そのセットされたカードを持ち主の手札に戻す。

その後、自分の手札から魔法・罠カード1枚をセットできる。

この効果は相手ターンでも発動できる。

この三つ目の効果を使ったのだと。

それならいつの間にか入れ替わったカードの謎も解ける。

だけど、

「しかし、それなら最初から伏せておけばいいのでは？ わざわざモンスター効果に頼らなくてもそうした方が確実ですよ」

そういうこと。

普通に考えればあまり意味のないこと。

だけど、彼女の性格を考えると一つ答えが見えてきた。

「それは彼女もエンターテイナーというときさ」

「え？」

優華は世界一のデュエリストになると常々言っていた。

そのためにいろいろ努力していることも知っている。

たぶん、これもその一環。

観客を驚かせるための一つのアイデアだったのだろう。

現に遊勝さん以外はみな度肝を抜かれたし。

「どちらでも戦術的には間違っ**て**はいないが、**そ**うした**ほう**が**お**も**し**ろ**い**と、彼女は思ったのだろう」

そういう遊勝さんを二人の子供がキラキラとした目で見つめている。

「もうそろそろあちらを見ないとせつかくのフィナーレを見逃してしまふよ」

彼の言う通りに視線を戻せば、もうすでに少年のターンは終わり、優華のターンが始まろうとしていた。

「ドロ〜」

YUKA手札4↓5

「ふむ、えつと〜」

「はは、なるほどね、そういうこと」  
「ん？」

考えるそぶりを見せた優華に少年が話しかける。  
「蟲惑魔なんて雑魚モンスター使ってるかと思えば、そっちのアーティファクトってモンスターが本命だったわけだ、だが残念だね、攻守ともにそれじゃ俺から守り切れることはできないよ」

事実、サイコ・ロードの攻撃力を上回るモンスターは場にはいない。今から召喚するかもしれないけど、あながち彼の言っていることは間違いではないように思えた。

けど、

「いいえ、蟲惑魔たちも私の大切な仲間です、そしてあなたに止めをさすのも、この蟲惑魔ですよ？」

「は？」

理解できないというような少年に、優華は四枚のカードを取り出す。

「この四枚で、チェックメイト、なのです」

そういつてまず一枚とモンスターゾーンへ。

「おいで、カズーラ」

【カズーラの蟲惑魔】

星4／地属性／植物族／攻 800／守2000

このカードは【ホール】または【落とし穴】と名のついた通常罠カードの効果を受けない。

自分が【ホール】または【落とし穴】と名のついた通常罠カードを発動した場合、デッキから【カズーラの蟲惑魔】以外の【蟲惑魔】と名のついたモンスター1体を選び、手札に加えるか特殊召喚できる。

【カズーラの蟲惑魔】の効果は1ターンに1度しか発動できない。

「そして今再び蘇って、ランカ」

二枚目、彼女が発動させたカードは【死者蘇生】。

これは墓地にいるモンスターを復活させるカード。

『——♡』

もう一度姿を現すランカの蟲惑魔。

しかしこれでも彼の人造人間には届かない。

「それがどうした！ たとえモンスターが復活しても俺のターンが回ってくれば」

「来ませんよ」

「は？」

三枚目、と言って彼女はそのカードを発動する。

「残念ながら、ここであなたはチェックメイトです」

【右手に盾を左手に剣を】

通常魔法

このカードの発動時にフィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの元々の攻撃力と元々の守備力を、エンドフェイズ時まで入れ替える。

「な、なにぃー！?!」

SHINGO

【人造人間―サイコ・ショッカー】

攻2400／守1500 ↓ 功1500／守2400

【人造人間―サイコ・ロード】

攻2600／守1600 ↓ 功1600／守2600

YUKA

【アーティファクト―カドケウス】

功1600／守2400 ↓ 功2400／守1600

【アーティファクト―アキレウス】

功1500／守2200 ↓ 功2200／守1500

【アーティファクト―ベガルタ】

攻1400／守2100 ↓ 功2100／守1400

【ランカの蟲惑魔】

攻1500／守1300 ↓ 功1300／守1500

【カズーラの蟲惑魔】

攻 800 / 守 2000 ↓ 功 2000 / 守 800

これでランカを除き、力の差は逆転した。

この攻撃が通れば、一気の2600のダメージが相手を襲うことになる。

だけど、これじゃ終わらない。

「最後に【団結の力】をランカの蟲惑魔に装備、です」

【団結の力】

装備魔法

装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールドの表側表示モンスターの数×800アップする。

【ランカの蟲惑魔】

功 1300 ↓ 功 5300

「こ、攻撃力、5300の蟲惑魔だって!？」

「はっ」

律儀に答えることはないと思うけど、これはひどい。

少年の手札はゼロ、つまり何もできないということを見たうえで優華はここまで強気に強化をしたのだ。

「でわでわ、フィナレです」

彼女がそう言つて杖を掲げ、振り下ろすと周りにいたモンスターたちが人造人間たちに襲い掛かる。

まず、ベガルタがサイコ・シヨツカーを切り裂いた。

「くっ!」

SHINGO LP 4000 ↓ LP 3400

次にアキレウスがサイコ・ロードをつぶした。

「あ、アクション・カードを!」

SHINGO LP 3400 ↓ LP 2600

「あつたー！」

その時、彼は求めていたアクション・カードを見つけた。それは先ほどまで優華が立っていた場所、カドケウスを取りに行くまでたっていたあの場所にカードは刺さっていた。

走り出すが攻撃はやまない、カズーラの蟲惑魔がサイコ・シヨツカーを植物の鞭で殴りつけた。

SHINGO LP2600 ↓ LP2100

「よしとっ——」

たと思つたその瞬間、彼の目の前に見覚えのある杖が突き刺さつた。

離れてみていたミエルたちには何が起こつたのかすべて見えていた。

優華はその手に持っていたカドケウスを少年に向かって放り投げたのだ。

わざわざ、サイコ・シヨツカー貫くように位置を微妙に移動して。

SHINGO LP2100 ↓ LP1200

アクションデュエルにおいて、硬直することはあつてはならない。

それは相手に付け入る隙を与えることになるから。

ほら、現に目の前までランカの蟲惑魔が迫つてる。

「あ……」

少年は蟲惑魔を見上げる。

その表情はこちらからは見えにくかつたけれど、恐怖しているは感じ取れた。

『――！』

なぜか蟲惑魔が心なしか怒っているように見える。

まるでさつき雑魚モンスターと言われたのを気にしているかのようだ。

『――！！』

「うわ……………！！？」

ランカの蟲惑魔は強くこぶしを握り締めると、そのまま彼のあごを下から殴りつけた。

見事なアッパーカットだった。

SHINGO LP1200 ↓ LP0000

そして、これにて勝敗は決した。

『しょ、勝者は！ 千寿優華ちゃんです!!』

アナウンサーの人も見とれていたけれど、終了の合図で我に返って  
実況を再開する。

周りの人も優華に惜しげもなく拍手を送っている。

「いえ〜い！」

それに応える彼女は、すごく輝いて見えた。

## 原作前

### こんな世界で

&月\$日

天気は晴れ、清々しいくらいに快晴。

天気予報のお姉さんも降水確率0%と報じていましたし、こんなにいい天気はめったにありません。

……まあ、私の心はこれでもなくくらいに曇天なのですけどね。

今日も少しチャンネルを変えてみれば、別の番組が目に入っ  
てい

く。  
競馬、相撲、今日のラツキーカード、サッカー、料理、アクション  
デュエルetc……。

……そう、この中に二つほどおかしいものがあります。

今日のラツキーカードって何!? アクションデュエルって何!?

もしかしてここって遊戯王!? あの精霊と融合したりDホイール  
と合体したり謎の背後霊とオーバレイしたりするあの!?

私も大会には出たことはないけれど、仲間を遊戯王で遊ぶ程度には  
はまっていたこともあるからルールなどはすぐに思い出せた。

私ができることに気が付いたのは今朝、目の前に散らばるカードを見  
つめていた時に、それまで頭の中にあつたモヤみたいなものが唐突に  
消えて、前世（死んだのかはわからないけれど）の私のことを思い出  
したのです。

ええ、当然のごとく混乱しましたとも。

それに拍車をかけるように、名前が変わっていたり、両親がすでに  
死別していて時々両親と知り合い(?)の家政婦さんが面倒を見てく  
れていたりと、前世と環境が変わりすぎて何をしていいのかわからな  
かった。(性別が変わらなかつたのは唯一の救いかな?)

今日この日記を書いているのは何かいいものはないかと遺品を

漁っていたら珍しい手帳を見つけたから。

思い出してから今までの人生を振り返ったり、これからの出来事を記録していくのもいいかもしれない。

そう思い、今書き記している。

カードゲーという名の戦闘アニメの世界に生れ落ちてしまった私ですが、できる限りのことはしていきたい。

と言いますか、何もしないでいきなり世界の危機に直面するなんてことはご勘弁願いたい。

ある程度の実力をつけて、この世界のことをもつと知っておくべきだと思う。

世界の危機ほどじゃないけど、通り魔紛いのデュエリストに襲い掛かられた時のために強さは必要不可欠だから。

今の私には不安しかないけれど、ここで過ごすうちに自信と実力をつけて、願わくば遊戯さんのようにデュエルキングを目指したい。

世界一のデュエリストに、私はなる!!

……ところで、今ニュースに出ていた『榊遊勝』って主人公じゃないですよね？

&月<日

とりあえずこの世界の特徴をつかみたい。

遊戯王の一作目とGXは（一部を除き）現代社会風な世界観だったけれど、5D'sとZEXALはDホイールやD・ゲイザーなどその作品の特徴を表すようなモノが登場してきます。

となるとこの世界での特徴と言えば、やはり連日テレビで放映される『アクションデュエル』なるものでしょうか。

私はあまり体験したことはないけれど、実体化したモンスターと



もにフィールドを駆け巡って、『アクション・カード』を取り合ってデュエルするらしい。

……まあモンスターが実体化するのはいつものことだとしても、アクション・カードは厄介極まりない。

たとえば手札0フィールド0に追いつめたとしても、このカード一枚で形勢がひっくり返ることすらあり得るかもしれない。

さらに、そのカードを手取るまでは除去もできないというおまけつき。

それに私的にアクション・カードを使つてのデュエルは遊戯王している感じがなくて嫌だ。どうせなら手持ちのカードのみで勝利をつかみたい。

幸いにも私は自分のデッキを持ち合わせている。これらのカードと相談してアクション・カード対策をしよう。

……私のデッキ、純蟲惑魔だけど大丈夫かな？

&月〓日

まさか冗談で書いたカードと相談が現実になってしまった件。

昨日日記を書いた後すぐに寝てしまったのだけれども、夜中にキヤツキヤウフフと騒ぐ少女の声に目を覚ましてみれば、そこには楽しそうに遊ぶ蟲惑魔たちの姿が!!

私起きているのに気づくとすぐに消えてしまったけど、見間違いでないと思う。

あれですか、デュエルモンスターの精霊というのですか？私、精霊見えたのですか？

その後デッキを指でつついて話しかけてみたものの、何やらひそひそ話が僅かに聞こえる程度で、姿を現せてはくれなかった。

この蟲惑魔たちは恥ずかしがり屋らしい。疑似餌なのに。

この娘たちとはたぶん長い付き合いになると思うから、今のうちから信頼関係は築いておきたいものである。

……そういえば、ランカの蟲惑魔なんてモンスター、前世にあったかな？

#月V日

先行ドロローがないのになかなか慣れない今日この頃。

今までの遊戯王は先行有利だったけれど、それがなくなってしまうたのは悲しい気がする。

けど、フィールド魔法を確実に自分が発動できるのはいいような気がする。前世だと合計一枚しか発動できないわけでしたし。

けど、今日テレビで見たフィールド魔法『海』&『山』はなかなかにかオスな光景でした。

……やっぱり先行ドロローがなくなったのは残念。

それはそうと今日は暇でしたので散歩に出かけてみることにしました。

この舞網市という場所は前世と比べてもなかなか奇妙？な場所かと思う。

一歩外へと足を踏み出せばデュエルモンスターのキャラクターが看板のほとんどに描かれ、ふと視界を別の場所へ逸らしてみるとデュエル塾という学び舎があちらこちらに点在しているのが見える。

デュエル塾ってあれかな？ 遊戯王のルールを学ぶのかな？ 一年くらいで終わりそうな気がするけれど……、いや、そういえばGXで三年かけて学んでたし、いろいろ教えることがあるのかもしれない。

……

……

……しかし、二時間も歩いてたわけではないのにもう2

0枚くらいカードひろったんですけど。

エレクトロマグネット・ウオリアー・ベータ  
電磁石の騎士β、ネクロス影霊衣の舞姫、墮天使イシユタムは知らない

カードで、……………レスキューキャット捨てたのだけえ!?

\*月◇日

小学校の帰りにパックを八つほど買ってみる。

遊戯王だとデッキは一人一つみたいな謎の習慣があるけれど、いくつかデッキを作っておかないと落ち着くかないもの。

デッキなんて対策してしまえば(事故らない限り)簡単に勝ててしまうものですし、三沢みたいにくっつかのデッキを使い分けるスタイルで行きたいと思う。

…………でもね、適当に買ったパックの中身が影霊衣と儀式関係だけだったのは、何か作威的なものを感じずにはいられない。

これはもう影霊衣デッキを組めという精霊のお告げなのかな?

何か釈然としないけれど、今私に足りないのはデッキなので文句は言えない。(しかも、見る限り影霊衣ってなかなか強そうだし)

…………それにしても、やっぱり見たことのないカードがちらほらと見受けられる。

私が死んで(?)から新しくカード増やしたのかな、コナミさん。

◇月!日

取り敢えずデッキを組んでみる。

マンジュ・ゴッドとか入れたから純影霊衣というわけにはいかないけど、なかなかいいデッキだと自負している。

それはそうと、日記をつけ始めてから何日か過ぎただけど、何か家政婦さんの様子がおかしい。

しきりに私の様子を伺ってくるし、昨日なんかデッキを組んでいる

ところを見て何か考え込んでいた……。  
私、何かしたかな？

☆☆日

ヒヤツ——。+、\、(、▽、\*)ノ。+。  
ハ——!!

\*月十日

昨日の日記を読み返して頭を抱える私。興奮のあまり意味わかんないこと書いてるし……。

昨日何があったかというと、なんと私！ 念願の『デュエルデイスク』を手に入れました!!

美田さん（家政婦さん）の様子がおかしかったのは私の誕生日プレゼントについて悩んでみたい。

そういえば昨日は私の誕生日だったのをすっかり忘れていた。最近ずっと散歩だったりデツキ組みだったりで忙しかったから……。

まあそんなことはさておき、念願の、念！ 願！ の！ デュエル！ デイスク！

綺麗な白銀で、カードプレートは澄んだ瑠璃色！

何か、携帯のような機能などが付いているけれど、それよりも一人

でソリッドビジョンを試してみたところ、ちやんと起動できた！

もふもふのレスキューキャットに触れて癒されたし、最近拾った灰<sup>は</sup>流<sup>る</sup>うらちやんと一緒にアペライオに乗ってラムペンを追いかけたりして楽しかった。

これ以上なくらいに満足。

今日は蟲惑魔たちを呼び出しているろと親密度を高める予定。  
楽しい一日になるといいな。

……………アクションファイルドじゃないとモン  
スターは実体化しないってまじ？

ある日、濃い人たちに、であつた

A月B日

物は試しにとソリッドビジョンを起動してみたところ、問題なく機能しました。

↓レスキューキャットに触れた、やったー！

↓ほかに何かないかと説明書を読む私。

↓『ソリッドビジョンは立体映像なので、触ることはできないよ』と優しく説明してくれるブラックマジシャンガールの絵を発見。

↓（。ラ。）!?

↓（；。ラ。）……

↓（。ラ。）……どうということなの？

つまりですか、あれですか。

あれはデュエルディスクの機能じゃなくて、私の力なのですか？

二十代さんやアキさんみたいにモンスターを実体化させることができるようになったということなのですか？

その気になれば町中に一銀河眼の光子竜皇《ギャラクシーアイズ・プライム・フォトン・ドラゴン》と一超銀河眼の時空龍《ネオ・ギャラクシーアイズ・タキオン・ドラゴン》でゴジラVSキングギドラごっこができるというわけですね！

あらヤダ私、危ない子。（物理的に

……それともう一つ思うことがあります。

ラムペンタたちと戯れたワタクシなのですけれど、あれもデュエルディスクの機能じゃないとするのならばすなわち、あの子たちも精霊だったということに!?

いや、確かに全カードに少なからず精霊が宿っているのですけれども!?

ていうか、ラムペンタ君追い回しちやっただよどうしよう!?

……とにかく、明日朝一で土下座しよう、そうしよう。

あ、蟲惑魔ちゃんたちとは仲良くなりました。

B月C日

ラムペンタ君マジ天使。

朝一で謝ったら許してくれた。本当にいい子（ノ、ハ、）……。。

本題が解決したので、今日あった出来事を書くことにする。

最近日課になりつつある舞網探索、今日はとりあえず河川敷を風の吹くまま気の向くままに歩いてみたところ。

……小さい子供と戯れる榊遊勝さんがおられました。

ふむ、テレビで見るとより二割増しくらいでダンディなおじ様……。

そして、彼と一緒にいるなんとなくカラーリングと髪型が似ている子供は……、息子さんかな？

たしか、『ユウヤ』（漢字わからないけれどたぶんユウの字は遊のはず）って言ってたから息子さんっぽい。

こんなところで何してるのかなあつと、少し三角座りで観察してみたところ。

何やら『エンタメデュエル』なるものの特訓をしているらしいのがわかった。

そういえば、遊勝さんも有名なエンタメデュエリストだったはず。その父親に憧れて、息子さんもエンタメの特訓をしているのかな？

笑顔はいいよ、笑顔は。十代さんも最後はいつも「ガツチャ！」って言ってしめてたし。（覇

王と二十代さんから全力で目を背けつつ

それ以外には特に面白いことはなかった。日暮れてきたことだし、早々に引き上げた私。

帰るちよつと前にユウヤ君と目が合ったような気がしたけど、まあ

すぐに忘れられると思う、子供だし。(私も日記がなかったら忘れてそう)

C月D日

個性というものは得ようとして得るものではなく、すでに得ているものだ。

その人物の今まで過ごしてきた環境、生まれ持った性格、周囲の人間や出会いによって培われ、金銭などでは決して買えないその人だけの宝物である。

……まあ、つまり何が言いたいかと申しますと。

私、キャラ薄くない？

昨日の榊親子や街のデュエリストを見ていて思ったのですが、みんなキャラがもう濃い濃い……。

水泳デュエリストや料理デュエリスト、さらには武闘家デュエリストや占いデュエリストなど、もう濃すぎる人材があふれかえっているように思う。

今話題の榊遊勝さんもエンタメという特技で皆を魅了しているみたいですし。

世界一のデュエリストになるためにも、私だけの個性を表に突き出していくことが大切だと思う。

しかし、元々が異世界生まれの私にこの世界の住人ほどはっちゃける(死語)ような人格はしていない。(学生時代……、魔眼……、中二病、うっアタマガ……)

私だと、どういうデュエルが似合うのだろうか？

蟲惑魔を使う小悪魔系デュエリスト？ ないない恥ずかしい。

影霊衣を使う黒魔術系デュエリスト？ 痛すぎる！

しかもそれだと使うデッキが固定されるから対策されやすいし、却下。

この世界特有のデッキを一つに絞る傾向を無視して複数のデッキを使い分けられることは強みだからなるべくそれを損なうことはし



たくない。

けど、それだけだと三沢君みたいに最後には空気になりそうだし……。

出きれば周りの人を引き付けるような強烈な個性、そうでなくても印象に残るような強い個性が欲しい、切実に欲しい。

……え？ 何、アトラ？ 今さつき自分が書いたこと見直してみなさいって？

………ワタシ、ナニモ、ミエナイネ。

いやいやいや、だってしょうがないじゃないですか、私あちら世界の出身ですし、D・ホイールと合体したり、裸で海岸を走り回ったり、かつとピングしたり、胡散臭い日本語を話すような隻眼の外国人みたいに、強烈な個性という名のアピールポイントがないと世間というもののはまるで過ぎてゆく季節のように忘れ去ってしまうものなのですよ!!

しかし、強烈すぎるものだと私の羞恥心が限界を超えちゃいそうですし。

うむむ……。

ん？ 何、ランカ？ これをお父さんの部屋から取ってきたって？

………ほう(？▽？)。

D月E日

早速美田さん相手に実践してみたところ。

「あら懐かしい、お母さんそっくりね……」

と涙ぐみながらありがたいコメントを頂きました。

え？ 私のお母さんってこんなのだったの？



その日、ミエルは朝から最高の気分だった。

今日の占いだって今年一番のラッキーな日になるって出てたし。

何より今日、運命を変える相手に出会うって占いに出ていたんだもの！

占いは最高！ ミエルの占いは百発百中！ 外したことなんて一度もないんだから！！

なのに、なのに……。

「どうしてこうなっちゃったのおー……!!」

目の前に聳え立つは壁、紛うことなき行き止まり。

ここは知らない路地裏。人の気配なんて全然ない。

ミエルがここに来てしまったのは、ちよつとした不運があつて、いつもはつけているリボンをその時はたまたま手に持っていたことに始まるの。

けど、その時不意に吹いた風がミエルのリボンを持って行ってしまつて、あれよあれよという間に、遠くの方へ。

当然、ミエルはリボンを追いかけたわ。

走って走って、見失ったら占つて。

ようやく追いついてリボン拾い上げてみれば、そこは見知らぬ路地の裏。

もちろん占つて帰ろうとしたわ。けどなぜか結果がおかしいの。

右に行けばいいと出た次には左に行けばいい。

後ろに行けばいいと出れば次には前に行けばいいと。

結果的に元の場所へ帰ってきてしまうの。

「う、ううう………」

帰りたい。

帰ってご飯食べて、暖かい布団に入って寝てしまいたい。

そう、ミエルが悲しみにくれて泣き出してしまいそうな時だった。ミエルが、彼女とであったのは。

「おやおやあ？　そこにいらっしやるのはどちら様かしら？」

バツと顔を上げる。

見ればいつの間にか目の前に、ミエルと同じくらいの歳の少女がそこにいた。

腰まで伸びる薄青みがかった白い色の髪に、綺麗な浅緑色の瞳を持った少女。

彼女は不思議そうに首を横に傾げ、ほほに人差し指を当てている。

「まあまあとりあえず、そんなところで座っていてもなんですし、中に入ります？」

あまーいお菓子や、温かいココアくらいならだせますので」

これから、ミエルの親友とも呼べる存在になる女の子。

「ああ、申し遅れました、そういえば自己紹介がまだでしたね、私の名前は――」

千樹優華せんじゆゆうかが、そこにいた。



☆月★日

夕ご飯の買い物から帰ってみれば、裏口前に女の子が落ちていた件

について。

いや、それだけ書くと犯罪っぽいかもしれないけれど、事実そうだったし。

何か知らないけれど、今にも泣きそうだったその子をとりあえず、家に上げて事情を聴いてみる。

すると、飛ばされたりボンを追っていたらここについていたことが判明。(アニメか、いやアニメだったわ、たぶん

いつもは占い?に頼って道がわかるらしいけど、今回は働かなかった模様。

デュエルディスクに電話の機能が付いていたはずだけれど、忘れてきたらしい。

仕方ないのでいくつかお菓子を渡して、保護者さんの電話番号を聞いて家の電話からかけてみることにする。

この子の両親にしては常識的な親御さんだったことにびっくり。(失礼かな? いや、でもすべてを占いに掛けるような勇気は私にはないし

それにしても、よくここまでたどり着いたものだと感心する。

ここら一带の道は分かりづらくて美田さんでさえたまに迷うというのに。

これもこの子の占いの成果なのかな?

少しして、車で迎えに来たご両親に連れられてあの子は去って行った。

.....あの子もご両親も、私のこのキャラ付けには無反応だったなあ。

もしかして、これもこの世界じゃ一般的?

いけると思ったんだけどなあ.....、『不思議ちゃんキャラ』。

融合もシンクロも、エクシーズすらもない

○月×日

方中ミエルと友達になりました。

……いやね、最初は話を聞くだけだったのだけど、あの子の勢いに押されに押され、いつの間にか連絡先を交換してしまっていました。若い子って恐ろしい。(私も若いけど

ま、まあ。(たぶんおそろくきつと)あの子も悪い子じゃないと思うし、しばらくはこのままでもいいと思う。

………それにしても、あの子の声を私どこかで聞いたことがある気がする。

どこだっけ？ 何か急に歌ってたような気がする。

■月□日

不思議系キャラがだんだんと根付いてきた今日この頃。

クラスの間みんなも最初は驚いていたけれど、最近は慣れてきてくれて普通に接してくるようになった。(前世だとたぶん引かれるよねえ……)

家政婦の美田さんも私が最初からこの性格だったかのように接してくれる。これは私の母に慣れていたからかもしれない。

私も最近はこのキャラを演じるのが楽しくなってきたし、キャラ付けとしては成功したと言ってもいい。

それにしても、蟲惑魔デツキで勝率九割五分を越えるのはこの世界独特の引きの良さ故なのか、それとも小学生相手じゃさすがに弱いものいじめなだけなのか……。

明日は町の強そうな人に声をかけて見よう。

きつと私を楽しませてくれるはず。

☆月▼日

放課後、さつそく影霊衣デツキを持って街へ出かける。

蟲惑魔じゃない理由は、蟲惑魔自体が対策しやすくほぼデツキだけで勝敗が決してしまいそうだから。(サイコシヨツカーだけで割と勝ちの目が消える)

五人くらいとデュエルしたけれど、そんなに強くはなかった。

次は場所を変えてみよう。

へ月へ日

収穫なし。次は時間帯を変えてみることにする。

◇月◇日

収穫なし。何がいけないのだろう。

へ・◇月◇日

収穫あり。ただしカード。

いまだ強者ツワモノは現れず。

へ・◇月へ・◇日

収穫なし。今日も満足できない。

へ●◇月へ・◇日

まん……、ぞく……。

へ●◇月へ●◇日

おい、デュエルしろよ。

◎月◎日

ふと日記を読み返し、正気に戻る私。

いけない、ライバルがいなさすぎて情緒不安定になってる。

ここ数日、この街一帯をまわって年上の人たちにどんどんデュエルを申し込んでみたけれど、どれもこれも大差がなかった。

せっかくチューナーを出したのにシンクロしなかったり、星がそろったのにエクシーズしなかったり、なぜか基本皆アドバンス召喚しか使わない。だから負ける。

……………いや、わかってる。

今の今までその問題から目をそらしてきたけれど、これは私がデビューする上で避けては通れない存在であり、いつかは直面するところ。

ただ、私はそれを認めたくなかった。それを認めてしまうと私の中の情熱の炎が消えてしまうような気がして。

みな、使わなかったのではなく、使えなかつたのだとしたら？

しようとしなかったのではなく、そもそも知らなかつたのだとしたら？

……この世界、実はエクストラデッキから召喚するタイプの特殊召喚が存在しない。

わかりやすく言えば、シンクロ、エクシーズ、さらには融合すらも、この世界には存在しない。

図書館のデュエルモンスターズについての関連書籍は端から端まで調べたし、友達にもそれとなく聞いてみたこともある。さらには父の部屋にあったパソコンを借りて検索をかけてみたけれど、そんなものは一片たりとも存在しなかった。

つまりは、この世界には通常召喚と儀式しか存在しないということになる。

超融合もできなければ、フィールドを感じてアクセルシンクロを行うことも、さらにはRランク・アップ・マジック U Mを発動することもできないということになる……。

それは、私にとっては失望でしかなかった。

それは、私が憧れた彼らのようなデュエルができないということを意味していたから。

それを自覚した途端、私は悲しくなった。

転生しようとも現実には厳しく、重く私にのしかかってくる。

所詮私は紛い物、彼らのように離れないということか。

私は、楽しいデュエルがしたいのに。

次は有名な人にあたっていくのがいいのかな？

まだまだ不安が残るけど、大会に出てみるのもいいかもしれない。

あとは優勝経験者をあたってみるとか？

まだまだいろいろあるけれど、考えがまとまらない。

この日記のおかげで多少はまとめられるけど、それでもまだぐちゃぐちゃ。

もう寝よう、寝てしまおう。

幸い明日は休日だ、このまま丸一日寝ていても何の問題もない。



ああ、頭が痛い。

——暗闇の中、声だけが聞こえる——

——1人2人ものではない、大勢の人ならざるものの声が静かに響く——

『やっと寝たみたい』

『今日は一段と荒れてたね』

『致し方あるまい、この次元において彼女ほどの担い手はそうそういるものではない』

『それに相手のデツキも悪いわ、影霊衣相手に並のアドバンス召喚のみでは勝てるわけじゃないじゃない』

『……そろそろ頃合いかもしれぬな』

『いいの?』

『問題ない、主は全ての召喚法を熟知しておられるご様子』

『じゃあ、最初はどこにする?』

『融合はだめ、今のままじゃ危なすぎる』

『シンクロも……ダメ、……あそこは、まだ早い』

『なら決まりだな』

『ええ、最初はエクシーズにしましょう』

『うまくいくかな?』

『いくといいね』

『はやいとこ蟲惑魔の仲間と、あっちにいる星座の戦士たちと合流しないとな』

『少しずつではあるけれど奴らの気配を強く感じるようになって……、たぶんそう遠くない未来、おそらく10年以内には復活すると見た方がいいかもしれないわ』

『それまでに我らは備えなければならぬ、再び世界が滅びぬように』

『奴に凌駕するほどのポテンシャルを秘めたこの子なら、必ずあの霸王を討ち取れる』

『私たちの声を聞いて、なおかつ実体化できるだけの魔力を持つこの子なら、きつとできる』

『そのために、俺たちはここに集った』

『アヤツも悪い人間ではなかったのじゃが、いかんせん環境が悪かった』

『優華もああなつてほしくはないのだけど』

『そのために我らが存在する』

『この子を誤った道へ歩ませぬよう、我らが導かねばならぬ』

『ダイジョブくダイジョウブく』

『大丈夫く大丈夫く』

『能天気ね、あなたたち』

『ああいう種族だからね』

『では、主が起きぬうちに』

『じゃあね』

——その声を最後に、物音ひとつ聞こえなくなった——

## 扉を開ければそこは異世界

朝が来た。

いつも通り朝が来た。

カーテンの隙間から差し込む朝日が、少し煩わしい。

外は今日も晴れ模様、しかし私の心は厚い雲に覆われたまま。

「はあ……」

どうしてこうもうまくいかないものか。

人が夢を持つと書いて儂いと読むけれど、まさにその通り。

あると思っていたものが、実はないと知らされた時の悲しみと絶望は、想像以上のものでした。

この世界に存在しない別の召喚方法、あれらを組み合わせればデュエルはもつと面白く、予想もしえないものになるのに。

だからこそ惜しい。

願うことならば、それらを使いこなす強者たちとしてのぎを削るデュエルを試してみたかった。

「……起きよ」

しかし、ないものをねだっても仕方がない。

たとえそれらがなくてもここが遊戯王の世界であることには違いない。

きつと私が想像できないようなことが起きる決まっている。

だから今はとりあえず身支度でもするとしよう。

休みの日だからといって、寝てばかりなのは少しもつたいないような気がするから。

「んんー」

体を起こし、背を伸ばす。

眠気を覚ますためにカーテンを開け、陽の光を浴びる。

「……まぶしい」

太陽なんて直接見るようなものじゃない。

目は冷めたけれど、今度は目がチカチカする。

ええつと、確かデュエルディスクは枕元においたような………、

あった。

階段を下りて、一階へ。少し歩いて洗面所に入り、顔を洗う。

『~~~~~♪』

「ありがとう、アトラ」

アトラの蟲惑魔が持つて来てくれたタオルで顔を拭いて、そのまま台所へ。

冷蔵庫にあった材料で、適当な朝食をつくる。

朝食にそれほど時間はかけたくないの、本当に簡単なものをつくることにする。……目玉焼きとトーストでいいや。

一人で食べる朝食にも最近は慣れてきた。

時々美田さんもいつしよに食べてはくれるけれど、それでも一人である時の方が長い。

学校に行けば友達や、放課後にはミエルがいるけれど、家にいる時などはずっと一人。

少しさびしさを感じてはいるが、孤独とまでは思っていない。

『~~~~~♪』

私にはこの子たちがいるから。

今も私の周りではしゃぐ小さな蟲惑魔たち、そして彼女らを遠くから見守る影霊衣の面々と、霊獣たち。

彼らがいるから、それほど寂しくはない。……何か最近勝手に実体化してははしゃいでいるけれど、大丈夫かなあ。

朝食を食べ終わったら、着替えて出かける準備をする。

ウエストポーチを腰にまわし、二つのデッキを入れて蓋を閉じる。子供用の鞆に必要なものとデュエルディスクを入れて、背負う。

「……うん、これでかなりよ〜」

いつも通りのキャラ作りも完璧。

そのまま裏口へと向い、お気に入りの靴をはいてドアノブに手をかける。

そのまま扉を開いて、目に入るのは天高くそびえる奇怪な塔……。  
「……？」

再び閉じる。

あれ、おかしいな？ 今視界が変だったような。

具体的に言えば、あるはずのないものがなくて、あつてはいけ  
ないものがあつたような。

「……」

再びオープン・ザ・ドア、視界に入るハートの塔、そして今一度ク  
ローズ・ザ・ドア。

「うーん、疲れてるのかな……」

昨日の疲れが響いているのかな？ 別の召喚がしたいがために幻  
覚を見ているのかしら？

しかし二回見た、そして二回ともそこにあつた。

ともすれば……。

「……うわぁ」

三回目もそこそれらがあるのは当然なわけで。

ねえ、私はいつたい誰にこの心中を打ち明ければいいのでしょうか？

扉を開けたらそこがハートランドシティだったなんて、さすがに予  
想できませんわ。



♥月♥日

トンネルを抜けると雪国ならぬハートランドシティだった。

まあ実際がトンネルじゃなくて扉でしたけどね。

ま、文章で書くとコミカル染みていますがやられた側はもう大混

乱。

そりやあ二度見くらいしてみたくなるものです。  
混乱しつつも、とりあえず探索開始。

こういう時に立ち止まってもどうしようもないので、行動あるのみ。

幸いにもZEXALが終わったのはつい最近、町並みはよく覚えていました。

しかし迷わないとも限らないので、しっかり道順をマッピングしながら進む私。

特徴的なものや、写真などを駆使して道を記録していきます。

探索開始から約二時間。

少しずつですがこの街のことがわかってきました。

まず一つ、ここはZEXALのハートランドシティではないということ。

公園でデュエルをしている子供たちを見かけるのですが、彼らが身に着けているのはD・ゲイザーとD・パッドではなくリアルソリッドビジョンが出る方のデュエルディスク……。

試しに子供たちに「D・ゲイザーって知ってるかな？」と問いかけたとところ、「何それ知らない」との回答が多く寄せられました……。Oh, my gosh.

まあそれはさておき、つまりここはZEXALのハートランドシティによく似た場所、ということになる。

名称はハートランドシティだけれども、ZEXALではない。パラルル的な何かかな。

二つ目、ここは私がいた舞網市との交流はない。

試しにデュエルディスクで私が知っている人全員に片っ端から通信をかけてみたところ、全員不在。

前世でいうところの「おかけになった番号は現在電源が入っていないか、電波が届かない場所にありません」状態。

となると、これは私一人がこちら側へ迷い込んだとみて間違いない。

そう考えると、舞網市にエクシードがなかったのも納得できる。デュエルディスクの通信範囲ってたしか前世の携帯電話くらいの性能のはずだから、これが通じない場所となると、何らかの理由で電波が届かない場所か、そもそも別の世界ということになる。

三つ目、こちらにも私の知らないカードが存在すること。

試しにパックを30袋買ってみたいところ、私の知らないフレシアの蟲惑魔とデュエルターミナルでお馴染みのセイクリッドによく似たテラナイトなるモンスター群を引き当てました。

しかし、完全に私の知らないものだけというわけではなく。よく知るガガガシリーズやアーティファクトなども混ぜていたことから、既存カテゴリに新規が混ぜられているような感じですよ。

以上のことから考えるに、ここはZEXALではないものの様々な理由があって独自発展したハートランドシティと考えるのが近いのかもしれない。

となるとナンバーズやバリアン世界、並びにアストラル世界もあるかどうか疑わしい。

せっかくだから遊馬先生やカイトさんに会いたかったけれど、少し難しいかも。(いるという保証がないし)

今日は疲れたので早めに帰る。

ハートランドシティのことが衝撃すぎて吹き飛んではいたけれど、念願のエクシードを手に入れたのだからこれはもう感動もの。

試しに召喚してみても問題はなかったもので、これはあちらでも使えるということになる。(まあ、最悪最後まであちらでの出番はないかもしれないけれど)

夕食後さっそく新しいデッキを作ろうかな？ 遊馬デッキとか口マンがありそう。

……いや、それ以前にこのままで大丈夫なのだろうか？

扉を開けたらハートランドシティということは、明日学校なので私はどうやって登校したらいいのだろうか？（今さつき気が付いた、私鈍感すぎ）

……とりあえずご飯たべよ。明日のことは明日考えればいいや。

♥月○日

なんか元に戻ってた。不思議。

夢だったんじゃないかとカードを確認すると、ちゃんとガガガとテラナイトはあった。

遊戯王で精霊界に行く話はよく聞くけれど、こういうパラレル系（？）の話は聞かないな。

まあ、何はともあれエクシーズが手に入っただけ良しとしよう。

このカードたちでどんなデッキを作ろうかな……。

♥月◆日

再び扉を開けたらハートランドシティ事件発生。寝て起きたらまたハートランドシティに繋がっていました。

前回からちようど一週間たっていたので、今日も日曜日なのは幸いだった。

とりあえず探索を再開することにする。今度はもつと広く探るところにしよう。

朝起きた時なんだか体が怠い気がするけれど、すぐに治った。

♥月♠日

なんとなく周期がつかめてきた。

どうやら一週間に一度のペースであちらへと繋がるみたい。にしても体が重い、風邪薬を飲むことにする。



今日はとりあえずデュエルスクールを中心に探っていく予定。

「結果」

疲れた。

いやあ広いわ、さすがハートランドシティ。

体力の続く限りあちこち回ってみたけれど、うん……、広すぎてまわれない。

それにしてもハートランド学園が見当たらない。

それっぽい場所は見つけたど、そこはハートランド・デュエル・スクール、スピード校と言われていた。

近くにいた同い年くらいの女の子に話を聞いてみたところ、ほかにもクローバー校というところがあるらしい。

なんでもプロデュエリスト養成校とか。

そのまましばらくその子と世間話をした後、いくつかパックを買って帰る。

やはりここはZEXALではなくよく似た世界だということを実感する一日だった。

……せめてD・ゲイザーだけでもないかなあ。あれかつこいいのに。

♥月◇日

今日もいつも通りあちらへ繋がる扉。そして感じる体のだるさ。

もしかしなくてもこれって、私の体力を引き換えにあちらへと繋いでない？

今日は家電屋さんをまわってみることにした。

D・ゲイザーについて知っている人はほとんどいなかったものの、電気屋さんのお爺さん店員がそのようなものがあつたことを教えてくれた。

なんでも、リアルソリッドビジョンが導入されてから急速に廃れたそうだ……。

がっかりしていた私だったけど、お爺さんが売れ残りのD・ゲイザーを譲ってくれた！

ただ、デュエルディスクとは連動していなし、サービスも終了なのでただの飾りらしいけれど、それでもうれしい。

次からはこれをつけてデュエルすることにしよう。

そういえば、一週間前にあったあの女の子に偶然会った。

なんでも家族で面白い物に来ていたらしい。

その後すぐにお兄さんに呼ばれて行ってしまったけれど、こちらには知り合いがないので話せてよかった。

また次会えるといいな、黒咲さん。

## 舞網チャンピオンシップ―ジュニア編―

..月〇日

ハートランドシティに通うようになってたぶん二年くらい過ぎたと思う。

六歳だった私も八歳になり、身長も若干伸びました。

まあ、だからと言って何が変わったかということもなく、あちらとこちらを行き来する以外は普通の小学生生活を過ごしております。

そこで少し思ったのですが……、もしかしてハートランドシティには、いやあちら側には融合がないんじゃないかな？

一年過ぎたあたりで違和感を感じ、そこから半年くらい後にその違和感の正体に気が付きました。

たしかZEXALではエクシーズこそ主流ですが、融合もある程度使われていたはずなのでこれには少し驚きました。

ここ二年で友好を深めた黒咲瑠璃ちゃん（以下瑠璃ちゃん）も、融合なんてしらないと言っていました……。 （あ、儀式はありました）

となれば、ある程度の推測が立ちます。

ハートランドシティ  
あちらにはエクシーズがあった、舞網市こちらには基本以外なかった。

ならほかの二つ、融合とシンクロはどこへ行ってしまったのか？

もしかして融合とシンクロも、それぞれ隔絶された別の場所で独自の発展を遂げているのではないのでしょうか？

エクシーズはあった。なら融合とシンクロもどこかにあつてしかるべきのはず。

あと忘れてはならないのは新召喚法。

5D's以降の遊戯王は、新番組になると新しい召喚が登場するようになりました。（まあ、まだ二つしかないけれど）

それを含めて考えると私の知らない場所があと最低二つはあることになる。

精霊たちに聞いてもだんまりだし……。 （何か知ってると思うのになあ）

それと関係あるかわからないけれど、このデュエルディスクにもお

かしなところがある。

なんで、エクシーズ使えるの？

遊戯王だからといってはそれまでだけれども、これは少しおかしい。

もともとそれが『ある』と考えて作らなきゃ、こんなことできるはずがない。

……いや、ちがう。それならもつと舞網市にほかの召喚法があふれているはず。

ならなぜ？

……もしかしてデュエルディスクには、召喚法に関するプログラムを一切していないのじゃはないのか？

私は今までTFなどのゲームのようにデュエルディスクに一定のパターン通りにしかデュエルできない仕掛けがあると思っ込んでいたけれど、そうじゃなくて。

デュエルディスク本体はただ召喚するだけの道具に過ぎなくて、召喚法はもつと別のところにあるのじゃないか？

禁止カードなどはこちらの人たちでも決めることができる。しかし、召喚法は？

あらかじめ知るはずのないものをプログラムできるわけがない。ならばどこ？

### 精霊界

ふとそう頭に浮かんだ。

きつとこちらにもあると思われる精霊界。

あそこならば、すべての召喚を熟知しているはずだ。

つまり、デュエルディスクは精霊界のルールに従って召喚を実行しているということになる。

最初にソリッドビジョンを開発したのは海馬、カード作ったのはペ

ガサス。

しかし、この二人の名前はこちらの歴史にはなかった。

では、誰がこの二つを作り上げたのだろうか？

調べても調べても、それら二つに行きつくことはできなかった。

ただ気が付けばあった、という気楽さしか感じ取ることができなかった。

まあ、製作者についてはそれほど重要ではないので放置するけれども。

このデュエルディスクの発案者はどうやって作り上げることができたのだろうか。

ただ少し、それが気になった。

……シャイニングドロワーってほんとどんな原理なのだろう。ルー尔的に。

…月×日

昨日気になったことについて、一つ実験してみた。

まずデュエルディスクを起動して、場に灰流うららとアトラの蟲惑魔を召喚する。

次にこの二体でシンクロ召喚を行うとどうなるか？

まず、シンクロ召喚お馴染みの片方のモンスターが星となり、もう片方のモンスターに組み合わせられる演出がされたのちにerrorと表示される。

このerrorは例えばモンスターゾーンに魔法カードを置いたり、なんの効果もなしに上級モンスターを召喚しようとするときこるデュエルディスクの機能の一つ。

この機能があるから、対戦相手は相手が行っている手順を正しいものと確認できる。

そこはわかっている。重要なのはerrorが出る少し前のところ。今回はerrorだったけれど演出が出たということは、もしもそ

の条件を満たすレベル七のシンクロモンスター（例えばブラック・ローズ・ドラゴンのような）がいれば、召喚できていたということじゃないのか？

逆に言えば、シンクロモンスターが存在しているということではないだろうか？

まあ、まだ確証も何もないけれどあるかもしれないという程度には希望が持てる。

こんなことも考えられないほど荒れていたあの頃がすこし恥ずかしい。

今日はこのくらいにして寝ることにする。

明日はもつといいことが起きるといいな。

○月&日

何もないまま半年以上が経過。悲しい。

あれから一向にほかの召喚を探る手掛かりがつかめないでいる。

正直一人では限界があるので、これは気長にやっていくしかないみたい。

そういえば、あと何か月かすれば舞網チャンピオンシップなるものが開催されると聞いた。

私は年齢制限でジュニアコースしか登録できないし、優勝しても特に何かあるというわけでもないので放置していたけれど、もうそろそろ参加しておいた方がいいかもしれない。（実績作りは大事）

○月Σ日

とりあえず参加条件を満たすように一日一回はデュエルする。（まあ、勝率は満たしているからあまり必要はないけど）

私の初めての公式大会なので少しわくわくするけれど、相手が小学生なのが少し残念なくらい……。

私を驚かせるような人がいるといいけど。

月 日

美田さんをお願いして参加登録終了。

あと少ししたら大会が始まる。

使用するデッキは蟲惑魔とアーティファクトの混成デッキにアクションデュエル用のカードを混ぜたもの。

これならある程度勝ち抜けるし、天サイコショットカー敵などが来ても対応できるようにはしてある。

あと、うっかり召喚してしまいそうだからエクストラデッキのカードをすべて抜いておく。

……そういえば、将来的にはアクションデュエルが主流になるわけだから今のうちに体を鍛えておいた方がいいのかもしれない。

明日からランニングを始めてみようかな。

月 日

明日は大会ということもあつてか、クラスの雰囲気心なしか騒がしいように思える。

同時に参加したかったけどできなかった子の嘆きも聞こえ、ここが遊戯王の世界だったということを改めて実感しました。

できる限りのことはやったので早めに寝ることにする。

目指すは、初出場初優勝。

できる限り派手なデュエルをやってみたい。



まあ正直なところ、これが現実なのよね。(たぶん新シリーズだけで)

唐突に何を言っているかわからないと思うけれど、今私はデュエルの真っ最中。

私の場にはモンスターが五体、蟲惑魔たちがそれぞれ一体ずつ。

相手の少年の場にモンスターはなし、伏せカードもなし、手札は残り三枚。(フィールド魔法はあり、『破邪の魔法壁』だけ)

「私はアトラの蟲惑魔で、ダイレクトアタック」

その宣言と同時に、目の前にいたアトラは相手へと走り出す。

『おっとおー！ 優華ちゃんここで勝負を決めるきだー!! さあ、茂武君、この攻撃が通ると君は負けちゃうぞー』

実況するアナウンサーの声が、少しうるさい。

あちらも仕事かもしれないけど、いい加減イライラしてきた。

「あ、アクション・カード!」

相手の少年はアクション・カードを探しに走り出す。

彼のライフポイントは残り1000、アトラの蟲惑魔で十分に削り切れる。

手札のカードを使わないところを見ると防げるカードはないのかもしれない。

……あつても使わないっていうこともあるから、少し残念かな。

「あ!!」

どうやら少年はアクション・カードを見つけたみたい。

それに向かって一目散に走り出す。

確かにそれがあればこの場はしのげる。

「でも残念♪」

そんなの許すはずがない。

「足元注意だよ」

「え、あ!?!」

私のモンスターは一体じゃない。

彼の足元が崩れ、バランスを崩した少年はそのままこけてしまう。

『——♡』



足元から現れたのはトリオンの蟲惑魔。

彼女が地中から地面を崩して彼をこけさせたということ。

お子様用アクションフィールドのおかげか、柔らかい素材でできて  
るみたいだから怪我はしてないはず。

けど、これは致命的な隙となる。

「あ……」

『♪』

彼の目と鼻の先にまで迫ったアトラの蟲惑魔は、ニコリとほほ笑  
む。

そして右手の中指と親指で円を作り、軽く彼の額にその中指を当て  
た。

いわゆる、デコピン、というものだ。

「うわー!!」

軽くあてただけでもデュエルモンスターズのルールは適応される  
もので、彼のライフはゼロとなる。

『決まったー! ジュニアコース準決勝戦、勝者は千樹優華ちゃん  
だー!!』

「ブイーー」

観客が少ないのが残念だけど、決めるときには決めておく。

その後インタビューがあつたような気がしたけどあまり覚えて  
いない。

キャラを作りつつ適当に答えたとおもう。

やっぱり、ジュニアコースに出たのは失敗だったかなあ……。

今回の相手は違ったけれど、小学生だからかプレイングミスが目立  
つ。

先行ドローをしようとしたり、上級モンスターをいきなり召喚しよ  
うとしたり……。

まあ明日で最後だし、さっさと決めて帰ろう。……ん？

「やあ、君が僕の対戦相手かな？」

帰ろうと思った私の行き先に、同じ年くらいの金髪の少年とその取

り巻きつぽいのが三人がいた。

「おや、君はどちら様かな？」

私はそう尋ねる。

大体予想はついているけど、これはお約束というもの。

「は、君は対戦カードも見えていないのかい？　しかたないから教えてあげるよ、明日の決勝戦で君と戦い、そして勝利する男！」

そう少年が言い放つと、取り巻き一ずが彼を目立たせるようにポーズを決め。

「沢渡シンゴさー！」

と爽やかに名乗る彼。

いや、それはいいから早くそこをどいてよ。

## ハートランドを歩く

米月餅日

チャンピオンシップで優勝しました。

いや、相手がまさか人造人間使ってくるとは思わなかった。

ぎりぎりで勝てたけど一步間違ったら普通に完封されて終わっていたかも。

正直に言つて、私この世界舐めてました。

同年代に私以上のデュエリストはいないなんて気分で大会出てました。

いやー、怖いわー、デュエリスト怖いわー。

やっぱり慢心してはだめね。子供でもあんなデュエルできるんだから、大人になったらもう考えるだけでも怖い。

そういえばそうと、子供らしい簡易な表彰とか終わってミエルのところに行つてみれば榊遊勝さんとユウヤ君十知らない人と知らない子供がいたのには驚いた。

話を聞くに、今日のドームの方の試合を見に来たついでにこちらも観戦しにきたらしい。(あらやだ恥ずかしい)

その時なぜアクション・カードを使わないのか尋ねられたけどはぐらかしておいた。

確かに足元にあつたときとか、少し遠めの場所に数枚あつたのは知っていたけれど、わざと無視した。

アクション・カードは確かにルールで認められた正当な権利だけど、歴代の遊戯王ルールを知っている私には使うのに少し戸惑いがある。

だから、私は基本使わない。

どうしても負けられないような時以外は使わないように自分にルールを設けている。

しかし、それだと相手だけが有利になる展開が続くということになるので、それだとさすがの私もきつい。

なので私はそれに対抗するために私流のアクションデュエルを編み出した。

私のアクションデュエルは妨害に始まり妨害に終わる。

私のデッキも妨害に特化しているし、蟲惑魔の性質的にもあっている。

私と相手がデュエルしている間に場に《《出ていない》》蟲惑魔の精霊たちがフィールドのアクション・カードを探す。

そしてそれを取らない取らせないようにあちこちに罫を仕掛け、取らせないように注意を引き付けることが私のアクションデュエルということ。

罫を仕掛ける役は場に出ている蟲惑魔と私の役目。

蟲惑魔たちは落とし穴とかを作り、私がそれに誘い込む。

もしくはアクション・カードに近い位置に私が移動し、わざと相手に気付かせてそれを取らせるように誘導したりと。

これなら観客のウケもよさそうだし、私も自分流のデュエルができるというわけ。

これをもっともつと伸ばしていけば、頂点を狙えるはず。

……まあ、今のところ蟲惑魔たちとしかできていないのが難点ではあるけど。(しかもまだまだ練習不足)

私のほかのデッキ、影霊衣・ガガガファンデッキ(ホープ抜き)・テラナイトでこれをどうやったらいいか悩みもの。

しかも、ガガガとテラナイトはまだこちらでは使えないし……。

まだまだ沢山ある問題点に頭を悩ませつつ、今日はお休みすることにする。

こつちでもガガガとテラナイト使いたいなあ……。

見月 麺日

今日も今日とてハートランドシティ探索。

いつも通りカードを拾ってはみるものの、さすがにばらつきがあつて使えないものも増えてきた。

バックを買ってはみるものの、あまりいいものではない。というところでここらあたりで探索を切り上げ、純粹にここを楽しむ方面へ切り替えるとする。

こちらの学校へ通うことはできないけれど、瑠璃ちゃんやこちらで知り合った子供たちと遊ぶことにしよう。

油月蕎日

朝は早くに起きてのランニングと筋力トレーニング。

夕方は学校帰りのランニング。

夜に適度に筋力トレーニング。

女の子としての自覚が薄れてきたかもしれないと危機感を覚え始める今日この頃。

前世だとこの歳（八歳）でこんなことしてたら将来よくて腹筋が割れた女の子、悪くてゴリラ女になりそう。

ここは遊戯王の世界、美男美女が多いから大丈夫だと信じたいけれど、一抹の不安が私を感じる。

けどアクシオンデュエルをしていくためには体力も筋力も必要だし、筋肉が付きすぎたと感じたら止めたらいいよね？

麵月塩日

九歳になりました千寿優華です。

半年くらい前から遊矢君（漢字教えてもらった）とその友達の柚子ちゃんとミエル経由でお友達をやらせていただいています。

まあ、学校が違うのでそんなに会う回数は多くないですけど、そこそこ仲がいいと自負しております。

その縁で、彼の親である遊勝さんが塾長をやっている遊勝塾を見学させてもらったのですけれど、……うん。

なんといいみましょうか、遊勝さんよりもその後輩の柚子のお父さん、柊修造さんがこれまたすごい濃い人でした。

名前通りといいますか、1に熱血2に熱血といった感じの人で、少し話しただけでも熱血という単語を何回か聞いた。

私は塾に通っていないので来ないかと誘ってもらいましたが（ミエルは占いをする塾に入っているらしい）、あまり生活費を無駄に消費するわけにはいかないのでお断りさせていただいた。（カードなどは必要経費）

……早くバイトができる年齢になりたい。

温月蕎日

今日は雨。

今日は両親の命日なのでお墓参りに行ってきた。

私に彼らの記憶はないけれど、私は彼らの娘であることには変わらないし、私を生んでくれたことには感謝しているのでこういうことは欠かさず行っている。

ただ、お墓の前で手を合わせる時に少し思う。

「今この人たちが生きていたらどんな感じだったのだろうか？」  
そう考えると、すこししみりした。

素月麵日

もう何度来たかも覚えていないほどにやってきましたハートランドシティ。

街を歩いていたところ瑠璃ちゃんと出会った。

しばらく話をしていたところ、彼のお兄さんらしき人がやってきた。

少し目つきが怖いけれど、妹思いのいいお兄さんだと思った。

そうそう、瑠璃ちゃんによるとRレイド・ラフターズ

Rというデツキブラック・フェザーを使うらしい。

聞いたことないけれど、鳥と聞くと5D、sのB、Fを思い出す。  
きつと強いんだらうなあ……。

炒月飯日  
なんだあれ。

炒月麵日

昨日、いつもいつも同じところだとさすがに飽きるのので、一度しか探索していないクローバー校方面へ赴いた私。

すると途中の広場で人だかりができているのを発見。

何かな？と覗いてみれば、その中央で二人の少年がデュエルをしていました。

一人は普通の少年でしたが、もう一人を見た時の衝撃を私は忘れません。

ZEXALでお馴染みの天城カイトさんを幼くして、少し爽やかにしたような少年が、そこにいました。

あまりの出来事に私は硬直、気が付けばデュエルは終わっていました。(それで昨日の日記も一言だけというありさま

急いで彼を探すものの、もうすでに姿はなく。

仕方ないと切り替えてその日は帰りました。

しかし、遊馬も小鳥もいないのに、カイトさんだけがいるというのも奇妙な話。(まるでゲスト登場みたいな中途半端さ

いや、そういえば元々ハートランドシティもZEXALのもの。

いても不思議じゃないけれど、どうしてカイトさんだけなのだろう？

またわからないことが一つ増えて、今日の日記を終えることにする。

別のキャラもいるかもしれないので、もう一度探索しなおす必要があるかもしれない。

## スラム街に迷い込む

?月?日

【朝】

十歳になりました。優華です。

最初にハートランドシティに行ったのがもう四年近く前というところに驚きつつ、それまでにあったいろいろな出来事を振り返ったりしてみる今日この頃。

思えばいろいろなことがありました。

精霊と出会い、ミエルと出会い、ハートランドシティに迷い込み、瑠璃ちゃんとの出会い、遊矢君や柚子ちゃんと出会ったり……。

様々な出会いと発見を繰り返し、今日にいたることの感慨深さと言ったらそれはもう日記には記すことはできないと思う。

だからね、たぶんすっかり腑抜けていたと思うんだ、私。

四年間という時間、それがハートランドシティに迷い込んだこの異様さをすっかり日常の一コマとして受け入れてしまっていた。

だからね、今朝起きて扉を開けた時、すごい驚きました。

……なんで扉開けたらスラム街に繋がってるん？

【昼】

扉を開ければそこはスラムなどという超常現象。

若干混乱したものの、四年前と似たようなものだと思い探索を開始。

それで分かったことと言えば、ここは私の知らない場所らしいというごくくらい。

活気あふれるとまではいかないものの、ある程度の人はいら



で。

適当に物陰に隠れつつ、街の人たちの様子を観察する。

けれど、なんとというかこう。

ハートランドシティと比べると、覇気がない、いや、元気がないように思える。

なんだろうこの違和感。

あとどうやらここは『シティ』と呼ばれているらしい。

そして、ここにはシンクロ召喚が存在していることがわかった。

(たぶんシンクロ担当)

ハートランドシティのことがあったからネオドミノシティ辺りでも行けるのかと思っていた私のわくわくを返してほしい。

今、この日記は適度にこのスラムを探索してる途中で、いったん家に帰って書いている。

次は夜になると思う。

## 【夜】

今日の調査終了。

結果としてはちよつと嫌なことが分かった。

昼から夜の探索は変装してやってみた。(そのための一時帰宅

個々の雰囲気は異様だったのも気になったし、嫌な予感がしたから。

目元を隠し、髪型も帽子で隠し、服装もいつものおしゃれではなく、目立たないものに変える。

そうして出てみれば、……なんともまあここはひどいところだった。

まず格差社会がひどい。

シティのトップスと呼ばれている人口1%の人たちが資産の99%を独占し、その他の人間はスラム街に住むことを強制されるとかすごいデイストピア。

あと噂によればセキュリティと呼ばれる警察っぽい組織につかま

ると収容所に入れられるらしい。

所々にちりばめられた5D's要素はうれしいけれど、さすがにこの状況では楽しめない。

さすがに動きすぎたので今日は早々に寝ることにする。

?月?日

【朝】

まさか寝て起きても景色がそのままとは思わなかったよ。

ふとカレンダーを見てみれば連休を記す赤い日付……。

ああ、なるほどね。連休だったからまだまだ遊べるドン!ということですかそうですか。(Orz)

……幸いにも予定はなかったので今日も探索にあてることにする。

【夜】

今日も一日が終わる。

今日の探索結果といえれば年に一度フレンドシップカップという大会があるらしいということと、その大会にでた人のうち、負けた人は帰ってきてはいないということ。

あとシンクロ召喚があるからということか、アクセルシンクロで有名なライディングデュエルも健在。

地下では違法デュエルが行われ、道路ではあのデュエル優先の迷惑システムが通常通り機能している。(今日もあつたけど、結局負けてセキュリティに連行されていった。

ライディングデュエルがあることはうれしいけれど、そこでふと気が付いた。

ワタシ十歳じゃん……、年齢と身長が全然足りないじゃん……。

一応探してはみたけれど、デュエルボードはなかった。(やつぱりネオドミノじゃないからかな?)

確か遊星が十八歳でアキが十六歳、龍亞龍可が十一歳だったはず。

それで双子はDホイールに乗ってなかったはずだから（アニメ）……、ちよつと厳しいかなあ。

?月?日

連休三日目、ある程度調べが付いたのでここからは趣味に走ることにする。

それで、今日分かったことは三つ。

一つ、ライディングデュエルについて。

5D'sではシンクロ召喚はすごい昔からあって、それと共にライディングデュエルもあったと思われる。（初代とGXにはなかったけど。

しかし、こちらでのライディングデュエルの歴史は浅く、トップスに不満を持ったコモンスの人々が始めたことがきっかけらしい。（シグナーなんてなかった。

またこちらのデュエルもリアルソリッドビジョンを使用しているため、事故が起こりやすいとのこと。（というか大丈夫? 死人とか出たりしない?

私もいつかはライディングデュエルをする予定なので、それまでにテクニクと知識を蓄えておきたいところ。

二つ、もはや恒例のカード拾い。

昨日と一昨日もいくつか拾ったけれど、今回は力を入れて探した。

結果? 結構拾うことができた。

知らないシリーズだと竜星と不知火、知っているものだとあのジャンクやシンクロン、ウオリアーなどのシリーズ。（これで遊星ファンデッキ作れるかな?

あとカードが落ちてることに疑問はないけど、もうちよつとカードを大切にしてほしいと思う。

三つ、D・ホイールについて。

ライディングデュエルには必要不可欠なこのバイク。

普通なら完成品を買い、説明書や専門誌などで整備の方法とかを学ぶべきなのだけれども、そんなものこんなスラムにはない。

トップスの所になればあるのかもしれないけれど、この街の住人で知らない私に買えるとは思えない。(そんなお金もない)

Q、つまり？ A、頑張って作ってね♡

というのは冗談で、正直この点に関しては手詰まり感がすごい。

知識方面はいずれは学ぶべきなのだけれども、さすがに自作まではできない。

一からパーツを揃えて、作り方調べて組み立てる。

これだけでも一体何年かかることやら……。

?月◆日

連休最終日。

たぶんおそらくきつと明日には帰れるはず。

かなり刺激的な四日間だったけれど、今思い返せばすごく楽しかったように思う。

特に今日はあちこち動きまわってすごく疲れた。

さすがにそこら辺をふらふらするのももったいないと思ったので、思い切ってシティの地下にあるという怪しい施設に潜入してみることにした。

伝説の傭兵のように段ボールをかぶって潜入……できたら面白かったけれど、さすがに怪しまれるのでそれはなし。

かわりに自分が気づかれにくくなる魔法を影霊衣の大魔導士にかけてもらい、それっぽい人の後ろをついていく。

監視カメラには十分に気を付けて、廊下の端から端をそそくさと、もしくはカサカサと壁に張り付くようにスニーキング。

怪しげな地下へのエレベーターに同伴させてもらい、ついたところは労働施設。

右を見ても労働者左を見ても労働者。しかもみんな明らかに強制

労働させられている様子。（後ろにかなり屈強な監視員が見張ってたし）

どうかしようかと一瞬考えたものの、今助けても社会自体が変わらない限りまだまだ同じことが続くのは目に見えてたし、正直全員助けられる実力も余裕もない。

なので少しの申し訳なきを感じつつ、彼らのことは放置。

まあ、運が良かったり囚人のように期限が決まっているのならいつかは出られると思う。（たぶんおそらくきつとメイビー）

そこでどうでなら何か使えるものはないかとあちこち漁ってみたところ、結構ジャンクパーツが多いけれど、中には使えそうなものはいくつか混じっているのがわかった。

ただ、私にはどう使えばいいのかわからないので放置。（そしてなぜかここにも落ちている遊戯王カード。どこかから紛れ込んだのだろうか？）

D・ホイールでも捨ててないかな？と都合がいいことを考えつつ、あちこち動き回っていたのですが、どうもここに面白そうなものはないことがわかっただけでした。

仕方ないので家路につこうとしていた帰り道の途中、急に警報が鳴り響いたかと思うと警備員に囲まれる私。

……魔法の効果、切れてんじゃん。

そこからは全力で逃げました。

私の持っている技術とカードのすべてを導入して夜のシテイを駆け巡りました。

アトラに糸を張ってもらって追手をからめとったり、源竜星―ボウテンコウに乗って飛び去ったり、もう一度魔法かけ直してもらったりと全力で、もう全力で逃げ回りました。

そして追手をまいたと確信して、さらに念のために回り道を使って家に帰る私。

汗を流し、夕食を食べて、体力が尽きる寸前で日記を書いている。

明日、舞網に戻っていると信じつつ、今日はお休みなさい。

## 少しずつ変化する日常

?月?日

初めてシテイに迷い込んで半年がたったと思う。

時間の経過は前世よりも心なしか遅く感じ、このままだとD・ホイルに乗れる年齢になるまでかなり長い間もやもやすることになりそう。

小さい頃は「早く大人になりたい」と何度か思ったこともあったけれど、生まれなおしてもう一度同じことを思うようになるとは思いませんでした。（転生自体予想外だったけど）

あの後無事に舞網に戻ることはできたものの、扉が二週間に一度の割合でシテイに通じるようになってしまった。

そのせいかは知らないけれど、ハートランドシテイに行ける日も二週間に一日の割合に減ってしまったのは残念な気がする。

そういえば、前に瑠璃ちゃんに会った時どこの学校か聞かれたけれどとりあえず誤魔化しておいた。

というか言えない、学校名だけでもそれがハートランドシテイ近くないことは調べればすぐわかると思うし、そもそもあちらとこちらを行き来もできないような場所なので説明もできない。

しばらくあちらでも不思議キャラを続けよう。

その方が誤魔化しやすいし。

?月?日

最近やけに塾の勧誘のチラシが増えた気がする今日この頃。

塾に興味がないと言われるとウソになるけれど、あまり通う気がないので今のところスルー。

遊矢君たちとは会いたいと思えば会えるし、ドローの練習とかよくわからないオカルト的な行為をするのはさすがに恥ずかしいから……。

今振り返ると前世ではややインドアよりだった私も、あちこち歩き

まわるせいで立派なアウトドア系女子。

もはや前世で同じくらいだったころの私をはるかに超えているかもしれない。

例えばこの前シティで屋根から滑り落ちた時、そこまで高くはなかったとは言え猫のように四肢で着地したことがあった。

あれはさすがに驚いた。

意識したわけではないのに勝手に体が動くというものを体験した。やはりここが遊戯王の世界なのか、もうすぐで十一歳のこの体での身体能力はすごいとしか言いようがない。

そのうち壁から壁へ蹴りあがることや、走りながらデュエルできるようになるかもしれない。

……いや、走りながらデュエルはやっぱなし、危ないから。

?月?日

事件発生。

遊勝さんが失踪した。

今日あるはずだった予定の試合に来ないどころか、現在進行形で行方不明。

今日一日じゃ何があったのかもわからなかった。

精霊たちに聞いても不明、どうやらこの街にはいないみたい。

まあ行方は早くわかるに越したことはないのだけれど、それよりも遊矢君がやばい。

観客からのバッシングのせいか、それとも父の失踪という事件のせいかかなり情緒不安定になってる。

柚子ちゃんやミエル、権現坂君（私とは最近知り合った）が励ましてるけれど、あれは立ち直るのに相当時間がかかりそう。

ああもう、今どこにいるのやら……。

?月?日

遊勝さんが失踪してからだいたい三ヶ月、今だに手がかりすらない。

遊矢君も最近では笑顔が増え、失踪のことを少しずつではあるものの受け止められるようになってきているみたい。

ニュースに失踪事件のことが話題にされることも少なくなっていくた。

いや、正確にはそれどころじゃないと言ったほうが正しいかもしれない。

それは数日前に赤馬零児という少年がジュニアユース選手権で優勝したことに始まる。

この少年、この舞網市で一番有名なデュエル塾、LDSの御曹司で最近まで無名だったのだけれども、この優勝を皮切りに一気に有名になった。

しかしそれだけではなく、大会後にLDSが重大発表を行った。

それはエクストラデッキの導入と融合召喚という新たな召喚法の追加というこの世界において革新的な代物だった。

これによりニュースや新聞は連日LDSや赤馬零児並びに融合召喚のことでちきりになって、遊勝さんの失踪などそれらに掻き消されるように話題に上ることはなくなっていくた。

待ちに待った融合がまさかあちらからやってくるとは意外だったけど、それを学ぶにはLDSに入らなければならないのはさすがにちよつとなあ……。

幸いにも融合系魔法カードや融合モンスターは市販のパックにて販売されることなので入手は簡単。

ただし、使い方を学ぶ必要があるけどね。私以外。

私も試しに買ってみたいところ、融合と炎の剣士や金色の魔像といったかなり初期の融合モンスターを引き当てられた。

……けど、肝心のカードがこれじゃあ融合主体のデッキを作ることになるまでまだまだ時間がかかりそう。



もしくはきつとどこかにある融合担当の都市へ先に行つてカードを集めるのも楽しそう。

ま、どこかわからないんですけどね。

?月?日

今日はシテイをぶらぶら探索。

もはや探索というよりかは散歩にちかいノリだけでも、気にせずぶらつく。

あつちへふらふら、こつちへふらふら。

風の吹くまま気の向くまま歩き続けたところ、古びた孤児院を発見。

壁を登り、顔だけ出して庭の覗き見たところ、机か何かの上でカードを並べデュエルをしている子供たちを発見。

本来なら少し見て飽きたら帰るつもりだったけれど、ある少年が取り出したカードの名前を聞いた途端、少し興味がわいた。

カード名は「クリアウイング・シンクロ・ドラゴン」。

シンクロの名を持つドラゴン族のカード。

珍しいそのカードに惹かれ、観察すること十数分。

まあさすがにそれだけ覗いていれば気づかれるのも当然なわけで。

先ほどのドラゴンを出した子供、ユーゴと呼ばれていた少年がそばにいた緑色の髪の少女（リンというらしい）をかばうように前に出て私を警戒していました。

当然といえば当然の行動なので、まずはこちらから何かする必要がありませんね。

そう考えた私は完全に壁を登り切り（今までずっと腕で支えてた、しびれた）、あのキャラのまま丁寧（丁寧）に自己紹介。

最初は完全に不審者扱いでしたが、私が子供ということもあって少し話せば受け入れてくれました。

今日は限界ぎりぎりまでこの孤児院で過ごし、彼らが夕ご飯になる前には帰宅しました。

それにしても、少し見せてもらったけれどあのシンクロ・ドラゴンの効果はちよつとやばい。

レベル5以上のモンスターが効果を発動、または効果の対象になった場合、それを無効にして破壊し、その攻撃力をシンクロ・ドラゴンに加えるという嫌な効果。

対策があれば別だけれど、これじゃあうかつに上級以上のモンスター効果を使うことができない。

なかなか侮れないカードだなあ……。

?月?日

二週間ぶりのシテイ。そして二週間ぶり、孤児院のみんな。今日も暇だったので遊びに行った。

いやあ子供とは言え遊戯王世界、やつぱり強い。

蟲惑魔デッキでユーゴ君やリンちゃんやデユエルしてみたけど、結構勝率は五分五分くらい。

やつぱエクストラデッキ使わない戦法だと不利になるねこれ。

舞網でシンクロやエクシーズ導入し始めたら迷わずにこつちも使い始めようそうしよう。

?月?日

すっかり忘れていた遊勝さんの行方はいまだ知れず。もうそろそろ一年が過ぎようとしていた。

私も十二歳になり、来年には中学生となる年齢まで来ていた。

そう言えば今年も舞網チャンピオンシップが開催されたのだけれども、ユース選手権はあの赤馬零児が優勝をかつさらっていった。

このまま来年には異例の十五歳という若さでプロ入りするかもしれないとニュースで言っていた。

……私の勝手な予想だけど、たぶんプロ入りしそう。強キャラみたいな感じがするし。

そうそうこの前シティの孤児院で気になるうわさを聞いた。

なんでもこのスラム街に隠された秘密の通路があって、その通路の先には伝説のD・ホイールが眠っているというらしい。

まあ、もちろん伝説といっても太古の昔から存在しているとかそういうのではなくて。

ある有名なD・ホイールの製作者が作り上げた傑作ともいえる作品を、それを欲しがったトップスたちの手から隠したという。

その人が作ったD・ホイールは通常のもので高性能で、さらに傑作ともなればどんなものなのか想像もつかないといわれ、数年前までトップス・コモنزの両方の人たちは血眼になって探していたらしい。

そんな噂、普通ならばただのうわさを切り捨ててしまいたいところなのだけれど、何が起るのかわからないのがこの世界。

何よりD・ホイールを求めていた私にはまさに渡りに船、暇つぶしにはちようどいいし、私も本格的に探してみることにする。

……………それはそうとすごい見覚えのある元キングのポスターがシティに溢れてる件について。

誰かいるとは思いましたがあなたでしたか……………。

## 伝説の始まり―前編―

シテイにも他と変わらず夜が来る。

当然人通りも減るし、人々は明日に備えて床につき始める。

そんな時間に、なぜか屋根の上にたたずむ少女が一人。

どうもみなさまこんばんわ、千樹優華です。

いやあ……うん、やっぱ見つからないね、伝説のD・ホイール。

右へ左へ上へ下へと探してはみたけれど、シテイ中の人が必死に探して見つからないものが、こんな小娘が短期間で見つけれられるはずもないですもんね。

なので、正攻法で探すのはやめます。疲れるだけだし。

古今東西どうしても探し物が見つからないとき、人は様々なものに頼ってきました。

霊視、タロットカード、ジnkステc……。

今私が行おうとしているのもその一種。

普通なら若干引かれるようなオカルトですが、いまさらそんなことを気にしてはこの世界では暮らしていけません。

……まあ、半信半疑なのは事実ですけど。

というわけでポケットから取り出したるは、今朝拾った適当にきれいな金属と家にあった適当な鎖をくっつけてできた私特製ペンデュラム！

遊矢君の持つてる水晶っぽいあれが少し気になってたんだよね。

時々オカルト雑誌とかでペンデュラムダウジングなるものを見かけて、これが本当だったら失せもの探しに便利だなあつと。

前世での的中率は悲しいものだったけれど、この世界ならきつと驚きの成果をたたき出してくれると信じたい。

「うん……」

とりあえず早速試しに振り子を揺らす。

程よい重さが指先に伝わる感じがとてもいい。

「よここよこ」

屋根にこのシテイの地図をひき、その上にペンデュラムをかざす。

「振り子さん振り子さん、伝説のD・ホイールはどこですか？」  
半ばふざけつつ、振り子を揺らして地図の上を滑らせる。

西へ東へそして北へと行ったところで突然振り子の動きが止まる。

「……………ん？」

右にずらす↓普通に揺れる。

戻す↓ビタつと止まる。

「……………うん」

目の前で発生した怪現象はさて置き、たぶんおそらくここにD・ホイールがあると考えていいのかもしれない。

地図に目印をつけ、さっそくその場所へ向かう。

幸いにもこの近くのので今夜中には見つけられるかもしれない。

「……………」

絶句、もう絶句ですわ。

目の前にあるのはごみごみごみごみの山。

そうよね、地下にゴミ処理施設があったから全部地下にあるとばかり思ってたけど、上にも一つ二つくらいあるよね。

……………まあ、木を隠すなら森の中というようにゴミの中に隠すのは間違っではないのかもしれないけれど、屋外なのは予想外。金属とかさびてないよね？

というわけで再びペンデュラムの出演。

「振り子さん振り子さん、伝説のD・ホイールはどこです……………か……………」

振り子を垂らした途端、鎖をピンと張りやや斜め右下を指す私のペンデュラム。

重力とかその他諸々の常識を完全無視して一点を指すその有様はある意味尊敬できるけれど、もうたぶんあまり使う機会はなさそう。

というか使えない、さすがに遊戯王世界でもみんな驚くわ。  
……気を取り直しつつ、ペンデュラムが示した方へ進む。

ひたすらその方向へ一直線に進むと、あるゴミの山にたどり着いた。

ペンデュラムはこの下を指しており、たぶん目的地はここで間違いないはず。

「ん？」

とりあえずゴミをどかしていくと、ごみの下に不自然な亀裂を見つけることができた。

いや、亀裂というよりかは何か塗装が剥げたような感じかな。

不思議に思っつてその周囲をどかして調べてみると、その亀裂の四方に見つけにくいけれど溝があった。

「これってもしかして……」

デュエルディスクを装着、トリシューラの影霊衣を召喚してそれを切り裂いてもらうと、その先に暗い底へ通じる階段が現れた。

思った通りこれは隠し扉だったよう、あまり整備はされなかったから扉の塗装が剥げていたみたい。

これは本当にD・ホイールがあるかもしれない。

そんなわくわくを胸に抱きつつ、残骸をどかして階段を下りる。

足元は薄いライトで照らされていたからかろうじてわかったものの、普段からこんな階段を使っていたらいつか足を踏みはずしてしまいうそ。

それから五分くらい階段を下りて行ったと思う。

そろそろ階段を下りるのにも飽き飽きし始めたころ、ようやく階下へと到着した。

うす暗い一本の通路を足元の蛍光灯の明かりを頼りに進む。

今度はそう長くなく、すぐに行き止まりへたどり着く。

ドアノブか何かはないか探していると、右手のあたりからピツと電子音。

そして横へスライドする扉。どうやら気づかないうちにタッチするタイプのスイッチに触れたみたい？

扉が閉まらないうちにさつきと中へ入る。

さつきと同じ要領でぺたぺたと壁を触っていくと同じ電子音がして、この部屋の照明がつく。

「おおおー……」

そこにあつたのはまさに工房といった景色だった。

よくわからない機械部品が散乱し、作業台と思われる大きな机にはいくつかの工具が揃えておいてある。

取り分けて目についたのは部屋の中央にあるそれ。

私が知る前世のバイクとも、このシティにある量産型D・ホイールとも異なる風貌をした、どこか懐かしさすら感じるそのD・ホイール。全体が薔薇のような深紅で染められ、所々に白銀のラインが走り、見るものすべてを魅了してしまいそうなほど美しいそれは、まるで誰かを待ちわびているかのようにそこに鎮座している。

初めて目にした瞬間から理解した。

これが噂のD・ホイールだと。

さらに詳しくそれを観察して思う。

このD・ホイール、やはりどこかで見たことがある？

いや、この形自体をみるのは初めてだけれども、妙な既視感を感じる。

「……ああ」

少し考えて、思い出す。

前々作の5D'sの十六夜アキが乗ってたD・ホイールに似てるんだ。

色や形はちよつと異なるけど、並べて姉妹品と言ってしまうつても違和感がないほどに通っている。

あまりベタベタ触るだけでは面白くないので、ほかのところもあさり始める私。

一旦D・ホイールから離れ、資料など何か情報になるものを探す。

こんな素人目から見ても素晴らしい物を隠さなきゃいけないかったのは、何か理由があつたからに違いない。

できやこの子は今頃こんなごみの下なんかじゃなく、もつと輝かしい舞台上で活躍していたはずだから。

そうやって探すこと数分、作業台の近くにあった段ボールの中に日誌らしいものを見つける。

他人の日記を盗み見るのはいろいろとマズイことだとはわかってはいるけれど、あのD・ホイールのことを知りたかった私は迷うことなくそれに目を通す。

読み始めてわかったことだけれどこれは前半は日記だけでも、後半になるにつれてこれを読む人へのメッセージとなっていた。

またこれを書いた人や関わった人の名前は後からぐしゃぐしゃに線をひかれ、まるで誰かから隠すようにすべて塗りつぶしてあった。

これの全文を要約するところなる。

・この日誌を書いた人はシテイでも有数の研究員だった。

・トップスやコモンスという差別、またこのシテイの現状をどうにかしたいと考えていた。

・今から七年以上前、リアルソリッドビジョンという未知の技術をもった怪しい人物が現れた。彼は瞬く間に行政評議会に取り入り、それ相応の地位を得たらしい。

・彼は治安維持局を半ば私物化し、怪しい実験を行っているようだ。また、このころからトップスとコモンス間の溝が深まっているように感じる。

・彼は身体を改造する実験や、特殊なチップを埋め込むことよって人間を操作するなど明らかに非人道的な行為に手を染めていた。そのことに筆者は危機感を感じていた

・筆者の周りに怪しい影を感じ始める。

・身の危険を感じた筆者は前々から研究していたカードと友人とともに作り上げた最高傑作であるD・ホイールを友人に託し、自分が囮になる。これ以降の記録はない。

以上がこの日誌の内容、そして最後のページにはこう記されていた。



『これを見つけた人間が心正しき人物であることを願ひ、我が友と作り上げた最高傑作と必ずや力になりうるカードを託す。

どうか彼の野望を、ジャン・ミシエル・ロジエの凶行を止めて欲しい』と。

正直、私は戸惑っていた。

安易な気持ちで見つけたこれが、そんなに思いが込められたものだとは思ひもしなかった。

ていうか重い、思いだけに？

そんな寒いことを言いたくなるくらいには、私は戸惑っていた。

最初はただD・ホイールが欲しかったから探してみたけれど、このような願いが託されたものだとは知らなかったし、何より私はシティ生まれの人間ではない。

このD・ホイールはこの場所で生まれ、現状に疑問を持ち、さらにこの社会を変えたいと強く思う人物にこそふさわしいのではないかとすら思えてくる。

「帰ろうかな……」

一旦帰ろう。

難しいことはまた明日にでも考えればいい。

私にはまだ時間がある。ちやんとD・ホイールに乗れる年齢になってもまだこれが見つかっていなければ、私が乗ってこれを作った人の願いを叶えてもいいかもしれない。

保留、とりあえず保留する。

今の私には何の力も権力もない、ただの子供。

残念だけど、これは今の私にはふさわしくない。

いつかきつとこれにふさわしい人物が現れ、この悲惨ともいえるシティの現状を変えてくれると信じている。

そう思つて帰ろうとしたとき、私が向かおうとした先、つまり私が下りてきた階段から人の気配を感じた。

それも一人ではなく、複数の人がこちらへと向かってきている。

それらが私が考えていたような人物だったらいいのだけど、残念ながら足音だけでは判断がつかない。

仕方ないので電気を消して物陰に隠れる。

「できれば、このカードを使うことがないといいけど……」  
懐から取り出したカードを見つめ、そう呟いてしまう。

【時の魔術師】と記されたそのカードは、ただ無機質に私を見つめていた。